

第73回目のGIS News!です

寒中お見舞い申し上げます。寒さも本番となるこの時期、海の恵みである寒鰯は、身も引き締まりいっそう美味しくなってきました。週末は「酒田の寒鰯祭を楽しみ、最上川スワンパークで白鳥と記念撮影、東の灘と称された鶴岡市大山でこの時期に出まわる新酒を味わう」というのが、身体も心も暖まる冬季限定の庄内観光コースとなっております。

「リモートセンシングに無人ヘリコプター」

衛星画像・航空写真は天候に左右され、画像データを入手するまでに時間がかかり、稲作での育成情報が欲しい梅雨時期には、衛星ベース、地上ベースともに問題が生じます。このような背景から最近、日本に適したリモートセンシングのプラットフォームとして、無人ヘリコプターによる低空センシングに注目が集まっているようです。(リモートセンシング: Remote Sensing = ある対象物を、物理的な接触は持たずに調べたり測ったりすること。)

「GISを利用した米の食味品質向上」

山形県農業試験場庄内支場では、平成12年度に水稻の登熟中期(8月中旬)の葉色により玄米のタンパク(高いと食味が低い)の含量を推定し、圃場1筆ごとの仕分け出荷する技術が開発されました。庄内の一部のカントリーエレベーターでは、既に仕分け出荷の取組みが始まっています。また、北海道や新潟県では、衛星画像から算出した植生指数で食味を推定する方法が開発され、GISと衛星画像を利用した食味仕分けを広域で効率的に行う生産地も出始めています。しかし、GISの導入運用には多額のコストがかかります。

庄内地方北部には、圃場整備された1万ヘクタール(3万筆)の広大な農地があり、62台の産業用無人ヘリコプターと180人の操縦者による農薬散布のインフラが整備されています。このインフラを生産地の競合力ある米づくり(食味と品質の向上)に役立てようとしています。産官学が協力してリモートセンシングへの無人ヘリコプターの利用と、公開された国産GIS(DiMSIS-Ex)の応用によって大幅なコスト低減を図り、GISによりカントリーエレベーター中心の生産組織で施肥食味・機械作業の管理に適用実証し、範囲を拡大して迅速な均質化を図る試みが始まろうとしています。

近い将来、GISの農業への普及・利用の定着化により、GIS単体のビジネスからGISを取り巻くソリューションのビジネスに拡大していくのではないのでしょうか。

参考文献:山形県農業試験場庄内支場 小田九二夫「農業分野におけるGIS利用の可能性」

次回のGIS News!

今回は2004年2月9日発行予定です。よろしくおつき合い下さい!

Geographic Information System

記事:協同組合山形県地理情報センター 佐藤 まゆみ 発行日:2004年1月19日



最上川スワンパーク
(撮影:2004.1.12)

